

## 平成2年度 国立大学学部・附属学校等教官 海外教育事情視察派遣（B団）に参加して

—— 訪問国（ハンガリー、スペイン、アメリカ）の概況と学校訪問 ——

河 西 尚 子

### I はじめに

「未知の国へ一度は行って見たい」というのは、多くの人が持っている素直な感情であろう。しかし、自分から決断し、実行に移すとかなり勇気のいることである。海外へは過去3回ばかり行ったことのある私だが、ヨーロッパ方面へ行って見たいという夢は、余りにも遠く、半ばあきらめに近いものであった。今回の降って湧いたような海外教育事情視察の話はとても嬉しい話ではあったが、「通訳」としてという二文字のおかげで恐怖と不安がつきまとい、バラ色の夢を描くような心境ではなかった。また、女性にとって25日間の旅行というは大変なことである。職場や家庭を約1ヶ月間空けるための準備、旅行の事前準備、さらに通訳という任務を果たすための研修など想像以上であった。しかし、せっかく研修の機会を作っていただいたのだからと、前向きに取り組んだ。英語を教えるものにとって、外国を見聞し、教育現場を訪問できることは千載一遇のチャンスである。そして、通訳という大役は、自分の英語を鍛え直す場でもある。開き直って考え、旅行の準備を始めたらずし心が安らいできた。幸い事故もなく、海外教育事情視察を終了することが出来たので、その結果を報告する。この体験を今後の授業の場で大いに生かしたいと思っている。

### II 事前研修及び事前準備

6月下旬、今回の派遣団の事前研修、事前打ち合わせ会が東京で開催された。その際、文部省からは過去の派遣団の状況から、次のような指導が行われた。

#### 1. 事前研修

今回の海外教育事業視察について何回も事前の会合を開くことは困難であり、次の点について事前研修として各団員に強く要望された。即ち

- (1) 研修の趣旨、旅行中の規律、学校視察態度などについて、十分に把握しておくこと。
- (2) 各係の分担事務の内容を、具体的且つできるだけ詳細に打ち合わせておくこと。

#### 2. 事前準備

今回の主要訪問国ハンガリー、スペイン、アメリカの教育事情や、各国の地理的、歴史的、経済的、文化的概況等について事前に十分に文献等で調査したり、まとめたりしておくよう指導された。即ち、

- (1) 従来、事前の調査、準備が不十分である。事前調査も研修の内である。各国の教育事情等について基本的知識を勉強しておくこと。
- (2) 我が国の地理的状況、政治・経済一般、教育制度等について、視察校で質問を受けた時、答

えられるようにしておく。また、学校制度についても、自分の経験のみに基づく説明をしないよう、自国の概況についても事前に十分把握しておくことが望ましい。

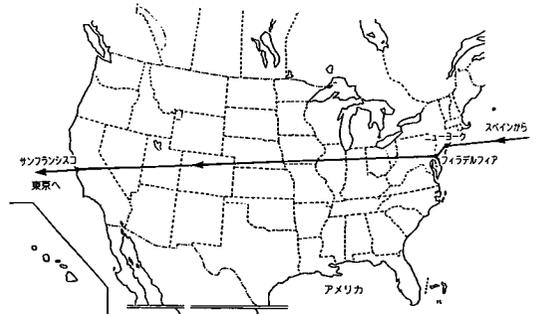
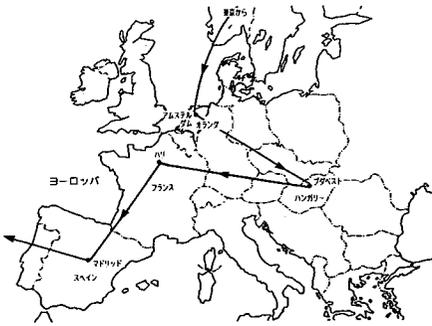
上記のように要望された公式の事前準備の他に、個人的準備もいろいろあった。語学指導を島根大学のケリー先生から週1回受けた。また訪問校への日本の生徒作品（昔話を英語の本にした中2の生徒の作品と、美術作品数点）、贈呈する民芸品や、レセプション用の品の準備等々である。

留守中の授業については、島根大学の2名の先生と本校英語科の2名の先生方による補充が決まり、事前の打ち合わせや、授業を参観してもらったりして、安心して出発することが出来た。

### Ⅲ 行程及び日程

今回の派遣団は、10月25日から11月18日までの25日間主要訪問国ハンガリー、スペイン、アメリカの3ヶ国を研修するのがねらいであり、行程及び日程は下記のとおりで行われた。ハンガリーで交通ストライキのため一部の日程が多少変更されたが、その他は日程どおりの研修が行われ、無事25日間の研修を終え、11月18日東京へ帰国した。

#### 行程



日 程 表

日数	月日	曜日	都 市 名	現地時間	交通機関	備 考	宿泊地
1	10月25日	木	東京(成田)発	21:30	KL868	(飛行時間17.30時間)	機 中
2	26日	金	アムステルダム着	06:00		移 動	
			アムステルダム発	11:35	KL285	市内観光7:30-10:30	ブタペスト
			ブタペスト着	13:40			
3	27日	土	ハンガリー		地下鉄	教育文化施設等視察	ブタペスト
4	28日	日	ブタペスト	10:00	バス		ソルノク
5	29日	月	ブタペスト発	10:13	バス	事前研修 移動 入11:7.7万人	ソルノク
			ハンガリー	14:15	100km		
6	30日	火	ソルノク			学 校 訪 問	ソルノク
7	31日	水	ソルノク			学 校 訪 問	ソルノク
8	11月1日	木	ソルノク発	05:30	バス		
			ブタペスト着	07:00	MA558	移 動	バ リ
			ブタペスト発	08:00	(AF558)	(飛行時間2.05時間)	
			パリ	10:05			
9	2日	金	パリ			教育文化施設等視察	バ リ
10	3日	土	パリ			グループ視察	バ リ
11	4日	日	パリ			グループ視察	バ リ
12	5日	月	パリ	12:00	AF635	移 動	マドリッド
			マドリッド	15:15		(飛行時間1.55時間)	
13	6日	火	マドリッド			教育文化施設等視察	マドリッド
			(スペイン)			入11:318.8万人	
14	7日	水	マドリッド			学 校 訪 問	マドリッド
15	8日	木	マドリッド			学 校 訪 問	マドリッド

日数	月日	曜日	都 市 名	現地時間	交通機関	備 考	宿泊地
16	9日	金	マドリッド			教育文化施設等視察	マドリッド
			レリ				
			マドリッド				
17	10日	土	マドリッド発	13:55	TW903	移 動	ニューヨーク
			ニューヨーク着	15:59		(飛行時間8.04時間)	
18	11日	日	ニューヨーク			教育文化施設等視察	ニューヨーク
			(ニューヨーク州・アメリカ合衆国)				
19	12日	月	ニューヨーク発	11:00	94 甲	移 動、事前研修	フィラデルフィア
			フィラデルフィア着	12:08	(145km)	入11:168.8万人	
20	13日	火	フィラデルフィア			学 校 訪 問	フィラデルフィア
			(ペンシルバニア州・アメリカ合衆国)				
21	14日	水	フィラデルフィア			学 校 訪 問	フィラデルフィア
22	15日	木	フィラデルフィア発	08:30	UA183	移 動	サンフランシスコ
			サンフランシスコ着	11:16		(飛行時間5.46時間)	
23	16日	金	サンフランシスコ			教育文化施設等視察	サンフランシスコ
			(カリフォルニア州・アメリカ合衆国)				
24	17日	土	サンフランシスコ発	13:55	UA137	移 動	機 中
			東京(成田)着	18:00		(飛行時間11.05時間)	
25	18日	日	東京(成田)着	18:00			

※上記日程は交通機関の都合により変更となる場合がございます。  
 KL: K.L.国際航空線 MA: マレーシア航空線 AF: フランス航空  
 TW: トランスワールド航空 UA: ユナイテッド航空

## Ⅳ 各国教育事情視察報告

### 1. ハンガリー

1990年10月25日、夜9時成田を飛び立った視察団一行30名は、一路アンカレッジへ向った。アンカレッジ空港内から見ると、回りの山々は真白な雪に覆われており、身の引きしまる思いがした。いよいよ外国へやって来たといえ緊張感からであろう。給油と小休憩の後、ヨーロッパ国際空港の中心、アムステルダムへ向って再び飛行機は飛び立った。思いがけずアムステルダムでは市内観光が許可され、風車、運河、ダイヤモンド研磨工場を見学した。そして、日本を発って18時間ぶりでハンガリーの首都ブダペストに着いた。



（ブダペストにて、通訳の桑島さんと）

（ブダペストにて、通訳の桑島さんと）

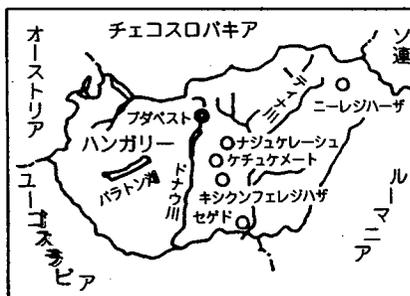
#### (1) ハンガリーの概況

ハンガリーはヨーロッパ中央部にあり、ソ連など5ヶ国と国境を接する内陸国で、ヨーロッパにおけるアジア系の人々が国民の大部分を占める国である。人口は1,070万（欧州13番目の人口）であり、言語はマジャール語である。政治、経済、文化の中心は首都ブダペストで、国の中央をドナウ河が流れ、世界で最も美しい都市の一つとされている。

歴史的に見ると、中央アジアの遊牧民マジャール

（ハンガリー周辺の地図）

人が築いた国である。紀元前1世紀から約500年の間は、ローマ帝国の一部であったが、9世紀の頃、ウラル山脈付近を原住地とするマジャール人が現在の国土に進出し定住した。その後、幾多の変遷があったが、第二次大戦時には枢軸国側に加わり、ソ連に接近したためドイツに全土を占領された。しかし、ソ連軍によって解放され、人民共和国を樹立、ソ連圏に属することになった。1956年、厳しい政治に対して自由を求める大規模な内乱（ハンガリー動乱）が起ったが、ソ連軍の介入で鎮圧された。



1968年以降、政府は経済政策を積極的に進め、国民との対話に力を入れ、'88～89年に自由化・民主化を断行した。東欧諸国の中では西欧への傾向が最も進んでいるといわれる。

#### (2) 学校教育制度

私たち視察団は6泊7日の日程でハンガリーを訪れたが、その内の2日間、ハンガリーの中部、広大な田園地帯の中にある町ソルノクの学校訪問を行った。初日、市教育委員会を表敬訪問し、美人教育長Dr. ペルキ・フェンツェ女史から説明を受けた。この時の通訳は桑島さんというベテランのハンガリー女性（日本人の夫を持ち、永らく日本に滞在していた人）のおか

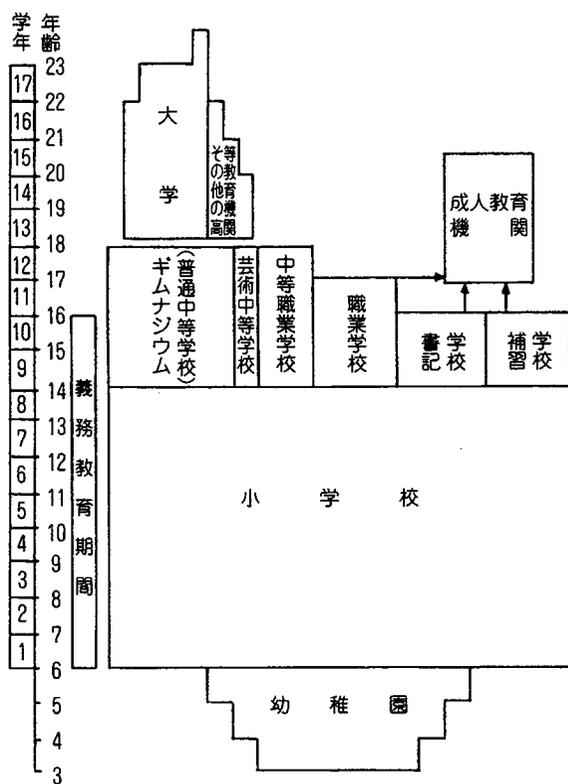
げで、団員一同緊張はしていたが、教育事情もよく理解することが出来た。教育長からは、現行8年制の義務教育が10年制に延長されたことや、外国語の履習を拡大（マジャー語を母国語とし、これまでロシア語が必修語とされてきたが、改革により、初等学校では、英、仏、独、露の中から1つ、中等学校ではそれにラテン語を加えた中から2ヶ国語選択履習させる）したことが説明された。また、現在進行中の教育プログラム改善の内、最も重要な点として、教科を必須教科と自由選択教科に分け、必須教科の時間数を削減することによって、学校の地域的特色や生徒の知識レベルの相違を考慮したより豊かな学習をめざしていることが説明された。更に、職業教育については、国家経済の要請を実現するため、学校と社会、職業機関とが密接な関係を保つことの重要性が指適された。最後に市の教育委員会は、学校経営の責任を各校長に持たせ、教育内容には深く関与しないこと等が説明された。

ハンガリーにおける学校系統図は右のようである。

(3) 学 校 訪 問

(ハンガリーの学校系統図)

「日本人をお迎えるのは初めてで、とても光栄です」と校長先生から歓迎の挨拶を受けたが、私たちにとっても初めての訪問校が、ペトフィ・サンドール(労働者専門学校)であった。この学校は職業専門学校でありながら、実習のための施設がなく、週の半分を国営工場で実習しているとのことで、私たちもバスでその工場へ出かけ、実習の様子を見学した。機械、設備等旧式なものが多く見られたが、生徒たちは熱心に作業に取り組んでいた。この工場も近い将来、民営化すれば実習できなくなるおそれがあり、校舎内に実習教室を持ちたいとのことであった。帰りに、私たちは生徒の作品のキャンドルスティックとキーホルダー入れをおみやげにいただいた。



翌日、いよいよ通訳として初仕事の学校訪問となった。前の晩は不安でよく眠れなかった。バルガ・カタリンギムナジウム(高等学校)の玄関ロビーで迎えてくださったのは、ミニスカート、黒ブーツスタイルの若く、とてもチャーミングな女性だった。彼女の案内で、生物、音楽、数学、ロシア語の授業参観をしたが、私は音楽と数学の授業を参観した。まず音楽は、男子10人、女子20人から成る合計30人程のクラスであった。ピアノなし、あるのは小さなレコードプ

レイヤーだけという教室で、若い女性教師が手拍子で歌唱指導を行っていた。ハンガリーでは、この国が生んだ作曲家・民族音楽学者コダーイ・ゾルタンが「万人のための音楽」といえ考えのもとに打ち立てたコダーイ・システムによる音楽を幼稚園から一貫して実施している。次の数学の授業では、生徒が男子6人、女子9人で、アメリカ人の先生による講義はすべて英語で行われていた。（ちなみに生物の授業もすべて英語で行われてい



（コダーイ音楽学校にて）

たとのことである。）授業の始めに、先生はハロウィーン用のかつらをかぶり、プレゼントを生徒に配りながら他文化の風習を伝えていた。授業は黒板とチョークによるものであったが、英語力が相当そなわっていないと授業についていけないし、どちらかといえば女生徒の方がより活発に授業に取り組んでいたことが印象深かった。お別れの挨拶の時、あの案内役の女性が実は副校長であったことが判り、通訳として大恥をかいたことを付記しておく。この国では、午後2時で授業が終了するので、午後訪問したティサ・パルティギムナジウムでは、教室内の授業参観はなかった。代わりに廊下（多目的ホール）で、合唱、ピアノ演奏、ハンガリー民族舞踊を見学した。これはクラブ活動の一環として行われているものであった。この学校は14才～18才までの生徒が学んでおり、音楽教育や医療教育を重視している。ソルノクの音楽の先生の6割がこの出身であり、また医療教育を受けた生徒もソルノクで活躍しているということであった。

ハンガリーを訪問して感じたことは、「首都ブタペストには自家用車が溢れている」ことであった。商業地区は渋滞が続く。空気はガソリン臭い。悪臭の原因となっているのは、トラバントといえ東ドイツ製のものだ。私たちが訪れた時、ガソリン値上げ反対の大規模な交通ストライキにぶつかり、バス、タクシーがほとんど動かなかった。その後このストが国の大きな問題になったと聞いたが今はどうであろうか。また、生活必需品は十分あるように思え、物価統制もあって驚くほど安い。しかし、大学卒、初等・中等教員の初任給が50平方メートルのアパートの家賃（月額）の約半分というような極端な経済構造のアンバランスがあるように思えた。すばらしいコーラスを聞かせてくれた少年少女のつぶらな瞳に、再び悲しみの涙が溢れることのないように、と祈りつつ、ブタペスト、ソルノクの町を後にした。

## 2. ス ペ イ ン

ハンガリーの後、パリの休日を十分楽しみ、次の訪問国スペインへ向かった。どこまでも続く平原から一変し、雪をかぶったピレネー山脈を越え、マドリッドに着いた。ドルをペセタに換金する。フォロントで始まり、次いでフラン、そしてペセタ。頭の中は日本円との対応で混乱する。

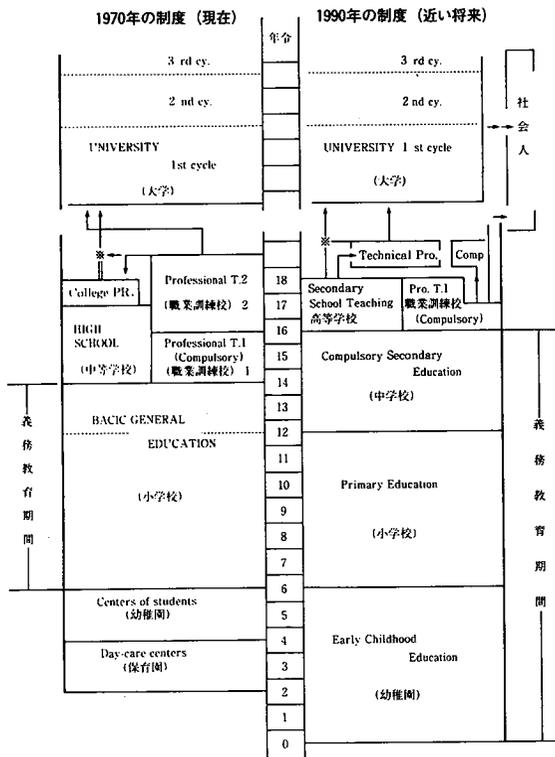
(1) スペインの概況

首都マドリッドは、イベリア半島のほぼ中央にあり、人口320万を越えるヨーロッパ有数の都市である。歴史的には、ローマ人の支配の後、6世紀に西ゴート族が入ってきて、トレドが首都として栄えた。8世紀には、アラブ人が西ゴート王国を治め、イスラム文化の首都をトレドにおいた。国土回復戦争の勝利で、キリスト教徒は16世紀マドリッドへ遷都するまでトレドを首都とした。コロンブスの新大陸発見後、スペインは世界の海を制する大帝国になったが、無敵艦隊の敗北後、国力は急速に衰退していき、19世紀には新大陸の全部を失った。スペイン市民戦争（1936～39）後、40年近くフランコ政権が続き、彼の死後、ファン・カルロス1世が元首となり、立憲君

(スペインの地図)



(スペインの学校系統図)



主制、1982年には社会労働政権が誕生し、民主化政治が行われつつある。

(2) 学校教育制度

私たちが訪問する一ヶ月前に、スペインでは法律改正に伴って、次のような教育改革案が出され、これが実施されつつある。

ア. 義務教育年限の延長（8年→10年）。普通基礎教育を行う小学校では6才から12才までの6年間とし、中学校を4年間、計10年間を義務教育とする。イ. 幼稚園教育の強化。就学前教育は3才から6才までの4年間であるが、改革法により、0才児から対象とするようになる。ウ. 普通高校と職業高校との連携の拡大。現行では小学校を優秀な成績で終了したと認定されたものは、総合中等学校へ進

平成2年度 国立大学学部・附属学校等教官海外教育事情視察派遣（B団）に参加して

み、大学予科（原語ではCouといわれ、中等学校内にある）を経て大学へ進む。他のものは職業生活に直接役立つ職業訓練学校へ進む。改訂では、中学校卒業後、高等学校か職業訓練学校へ進む。高等学校卒業者は大学予科に進み、更に大学進学の道を歩む。一方、職業訓練校へ進んだものは就職するか、大学への道を歩むことになる。

これらの改訂の基本的な考えは国民が等しく教育を受ける権利を確立させることにあり、具体的な面は、個々の学校の理解をもって行うとしている。一律強制的には実施しない方針で、その成果は今後10年はかかるものとみられている。

（サン・イシドロ学校の概要）

訪問学校	学校名	INSTITUTO DE BACHILLERATO "SAN ISHIDRO"	
	所在地	c/TOLEDO 69. MADRID 28005	
	創立年	1566~1572	
	校長名	Sr. D. VICENTE FERNANDEZ BURGUEÑO	
教職員	教員数	100名	
	事務職員	6名	
	その他の職員	7名	
	週当たり授業時数	18時間	
生徒数	1日の勤務時間数	約5時間 (8:30 AM~10:30 PM)	
	在籍数	1590名	
	学年数	4	学級数
学校行事等	年間授業日数	10月~9月	
	週間授業時数	5H	
	学年の開始・終了	10月1日~6月30日	
	休業期間	7月1日~8月31日	
	クラブ活動	有 無	
教科	必修	言語、理科、文学、スポーツ	
	選択	技術、コンピュータ、デザイン、写真、映像	
施設	普通教室数	47	
	特別教室数・名称等	2 4	
教科書	選択責任者	校長	
	検定の有無	(有) 無	
	有償・無償	(有償) 貸与・無償	
その他	男女共学	(共学) 別学	
	給食	有 (無)	
	P T Aの有無	(有) 無	
	現職教育	有 (無)	
	教育実習	有	
学校の種別	健康管理内容	担当者 心理学者	
	進学率	55%	
学校の種別 幼稚園・小学校・(中学校)・高等学校・養護学校 その他 ( )			

(3) 学校訪問

マドリッドの教育省で、1970年に制定された「教育改革法」が教育の民主化を図る見地から1ヶ月前に改訂されたとの説明を受けた。11月7日の午後、400年の教育歴史を持ち、最も由緒ある学校の1つであるサン・イシドロ総合中等学校を訪問した。授業は午前の部、午後の部、夜間の部の三部から成り、その他に好きな授業だけを受けられる自由学生を含めると総数1万にも及ぶ超マンモス校であり、本年度から始まった教育制度の改革をいち早く受け入れ、実践している学校である。校長先生の説明では、当面午前の部を新制度、午後の部を旧制度で実施し、10年内にすべてを新制度に移行していく方針とのことであった。



(アンドレス・マンホン小学校にて)

翌日、職業訓練校を訪問した。玄関を入ったロビーで、大きな学校の模型を囲み、副校長先生から学校の概要を聞いた。この学校は日本の総合高校に職業訓練大学校をプラスしたような制度をとっているのが特徴である。専攻課程としては電気、電子、建築、製図、アートクラブ、自動車、木工、金工、化学、光学、さらに大学進学課程がある。広い実習室がたくさんあり、少人数の学生が学んでいた。コンピューター関係はさすがに人気があり、学生数も多かった。午前中（昼食は大体2時から）、もう1校訪問したのがアンドレス・マンホン小学校である。5年生の教室に入ると、テスト中にもかかわらずスペインの歴史を折り込んだ歌で歓迎された。見学後の説明で、課外活動は父兄が選んだ学校以外の指導者によって指導されていること、昼食時間は2時間あり、食堂や自宅で食べてもよいことなどがユニークな点であった。

その日の午後行われた返礼レセプションでは、教育省や訪問校の来賓の方々約20名と楽しく歓談することが出来た。英語を話せる人が多く、お互いの国のこと、家族のこと、女性が働くということなどについて話すことが出来、とても有意義な会であった。日本で歌われている「雪山讃歌」のもと歌がスペインであることをこの時初めて知った。

スペイン滞在中、天候はどんよりとしており、雨に見舞われることが多かったが、明るく話し好きのスペインの人たちと接することによって、気持の上では晴れることが多かった。ただ、今でも気にかかることは、夜9時を過ぎても子どもたちが路上で元気よく遊んでいたことである。午後の仕事が大抵4時～8時までとすれば夕食は9時過ぎることは致し方ないことであろうけれども。



(レセプションにて。右は教育省  
マリア・ドロレス国際部長)

### 3. アメリカ合衆国

ニューヨークから鉄道を利用して、次の訪問地フィラデルフィアへ移動した。飛行機と違い、車窓から外をゆっくりと眺めることが出来、深まりゆく秋を楽しむことが出来た。列車の出発が20分位遅れたので、車内の添乗員さんが車掌さんに「いつ着くのか」と尋ねたところ、彼は「分らない」と言っただけだった。今回の旅を通して、私の中に「待つ」という心構えが大分出来たつもりでいたが、日本の鉄道事情からは考えがたいことであった。

#### (1) フィラデルフィアの概要

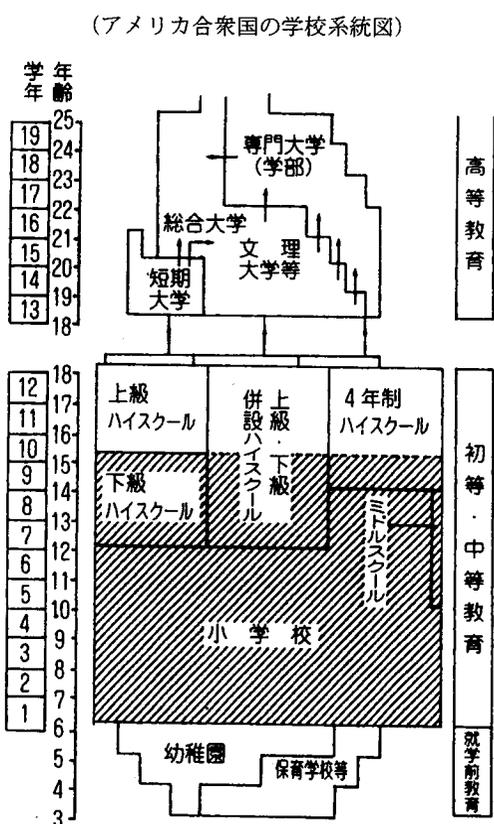
アメリカ北東部、ペンシルバニア州東南部、同州最大の都市で、アメリカの発祥地 'The Cradle of the Nation' と呼ばれるフィラデルフィア（地名はギリシャ語で「兄弟愛」の意）は、人口168万、最近の大がかりな都市改良計画によって美しい歴史都市に生まれ変わり、訪れるものに安らぎを感じさせる町である。1681年、英国よりクェーカー教徒がこの地域に最初に定住し、指導者ウィリアム・ベンの建設事業と貿易、通商によって英国植民地最大の港町に発展した。

フィラデルフィアの誇る多才な政治家・科学者であるベンジャミン・フランクリンの名は、今も町のあちらこちらに見られる。ボストンで始まった独立戦争は、フィラデルフィアにも反植民地運動として広がり、議会は革命本部になり、アメリカ独立への中核として機能した。1776年7月4日、独立宣言と米国憲法が採択されて首府となり、1880年まで政治の中心地であった。ここは、歴史の重みをもった町である。特にインディペンダンス・ナショナルパーク附近は、アメリカ初の建造物が多く残されており、アメリカの歴史を肌で感ずるのにふさわしい地であった。

(2) 学校教育制度

連邦国家であるアメリカ合衆国では、教育は州の権限事項とされており、学校制度、教育行政は基本的には各州独自の権限によって運営されている。各州はその州内の教育に関する権限のうち、かなりの部分を地方の学区に移譲しており、初等・中等学校などの設置、及びその実際上の管理運営は地方学区により行われ、州及び連邦政府はそれを助成している。

アメリカ合衆国は多民族国家である。いずれの都市も多数の人種から成立っている。フィラデルフィア学区（The School District of Philadelphia）は、公立学校生徒20万（私立学校生徒はおよそ10万）の内、約60%（12万）がAfrican-American（黒人）、8%（1.7万）がHispanic（中南米諸国から）、23%（4.5万）がWhite（白人）、その他Asianなども含まれ、話される言語はおよそ80種類にも及ぶという。また、半分以上の子どもが貧困ラインを下回る低所得者の子どもであり、食物がない、宿題が出来ない、親の支えがない、という状況下にある。また、英語を十分話せない子どもがたくさんおり、2万人以上の子どもが何らかの障害を持っている。こうした難問を抱えながら、「子ども第一」という基本原則に立ち、5年後を見通して、教育に関する10項目のゴールを決定した。

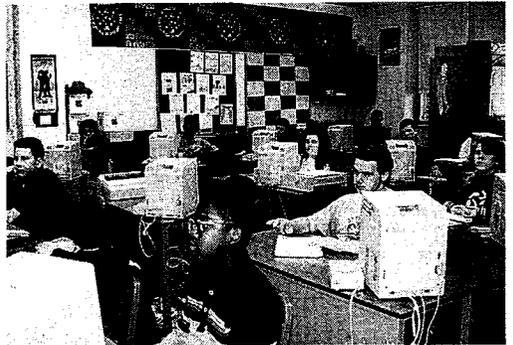


(フィラデルフィア教育委員会にて)

これは、教育関係者、父兄ら約2万人によるディスカッションの末、作成されたもので、1990年4月教育委員会がこれを採用した。この教育に必要な予算として年間12億ドル、また英語能力をつけるための特別学級、貧困家庭の子どもに朝食、昼食費等の補助金として7,800万ドルが連邦政府から支給されている。

### (3) 学 校 訪 問

児童・生徒が利用するスクール・バスで、私たちが学校訪問に出かけた。はじめに訪れたワイドナー養護学校は、ほとんどの子どもが車椅子使用であった。校内も教室もとても明るく、車椅子やヘッド・ギアを修理する技師がいたり、子どもが一人で日常生活が出来るようにと、キッチン・バスルーム等を設置したモデルルームがあり、これまで養護学校を訪れる機会のなかつ

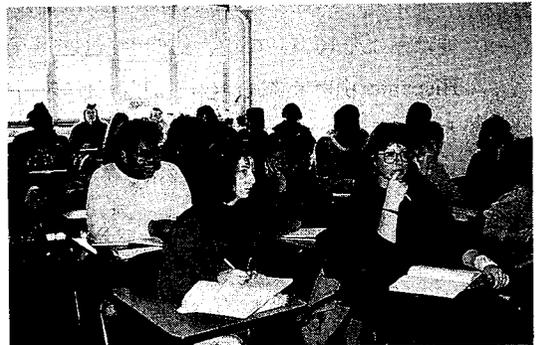


(コンピューターの授業中)

た私には驚くことが多かった。翌日訪問したスタントン小学校では、美しく情熱的なバーニー校長先生と、私たちをエスコートして校舎内を案内してくれた子どもたちから、詳しい説明を受けた。この学校は、当学校区の「子ども第一に」という提唱を熱意をもって実行している学校であった。帰り際、校長先生が案内役の子どもたちをやさしく抱きしめて、誉めている姿が印象的だった。それにしてもあの校長先生の英語は速すぎて理解するのに一苦労であった。次のジョン・ターナー中学校では、オープン・スペースの教室での授業を参観した。当市で訪問した学校は、ほとんどがAfrican-Americanの子どもが通う学校で、そこで教える先生方の構成もいろいろな国の出身者から成立っている。

## V お わ り に

日本人であれば、日本のことはよく分かっているような気がしていたが、外国を旅してみると、今まで気付かなかったことが数多く見えてくる。日本再発見の機会を与えていただき、本当に貴重な体験が出来たことを改めて感謝している。21世紀を目前にひかえ、世界の情勢は益々多様化し複雑化している。国際化の進展に伴い、我が国でも国際理解教育の推進がうたわれるが、外国を旅して私なりに気付いたことをいくつか挙げてみる。① 英語教師の立場からいうと、英語が話せることが外国人との交流には先ず欠かせないとい



(他の班が訪問したウォルター・ビドル・ソウル農業科学高校9年~12年の4年制で普通高校に比べて、入学や卒業が難しく、大学への進学は80%を超えるという。)

平成2年度 国立大学学部・附属学校等教官海外教育事情視察派遣（B団）に参加して

うことである。ジェスチャーでかなり通じることは確かだが、細かい点になるとそうはいかない。国際語である英語の必要性をこれからも授業で語っていきたい。② 学校訪問をして感じることは、その国の歴史、伝統が、国民や環境（史跡、教育、文化等）の中にしっかり根づいていることである。それらを誇りに思い、後世に伝えようとしていることがありありと伺える。日本人のやり方は、目先のことにとらわれて簡単に文化的遺産などを切り捨てようとしているように思えてならない。③ 「己れも生きよ。他人も生かせ」といふ諺がある。己れだけが生きようとする面が日本人は強すぎるのではないか。国際人として恥ずかしくない生き方をしなければならないと強く思うのである。ニューヨークの夜空に、赤・白・青の3色の光を放つエンパイア・ステートビル、それは中東に派遣されているアメリカ兵の無事を祈って星条旗の色にあわせた照明であるという。この照明が早く元通りになることを祈りながら、研修報告を終えたい。

今回の海外教育事情視察派遣に参加の機会を与えて頂いた文部省や島根大学の関係各位、ならびに学校当局やお世話いただいた多くの方々に衷心より厚くお礼を申し上げます。

〈主な参考文献〉

平成2年度国立大学・学部附属学校等教官海外教育事情視察派遣団（B団）報告書